



選ばれたプレイヤーたち

「夜なのに明かりがついてる……。」

広い玄関ホール正面には、大きな階段がのびていた。

「オレ、博物館が好きなんだ。博物館って、ふつうなら絶対にかかわらない時代の物と出会えるだろ？」

「へえ、そんなふうに考えたことなかったなあ。」

頭上には、「三種の神器展」と書かれた大きなたれ幕が下がっていて。

ホールには、たくさんの長机がならび、その上に、たくさんの勾玉、鏡、剣のレプリカが展示されていた。

「三種の神器っていうのは、昔から天皇に伝わる宝物なんだ。いまでも、天皇になるときの式典とかで使ってるらしいぜ！」

ホールには、すでに三人の同じ年くらいの子たちがいた。

男子二人と、女子一人だ。

三人とも、リュックやカバンをかかえていて、準備は万全の様子だった。

「もう先客がいるんだな！ オレは大和、小学六年生だ。よろしくな！」

大和の大きな声が、館内にひびく。

ふり返った短髪の少年が、切れ長のひとみを光らせた。

「おれは草乃スサナギ、小六だ。絶対におれが勝つ。」

体操選手のようなジャージ姿の草乃は、うでを組んでつきはなすように言った。

この子、どこかで見たことがある気がする。

「あなたはたしか、全世界体操競技のジュニア大会で、二位の銀メダルをとっていた方で

しょう？ 朝のニュースで見たわ。」

つややかな長い黒髪に、和風の服を身にまとった女子が言った。

「うるせえ。二位って言うな！」

顔をしかめた草乃が、女子をにらんだ。

そうだ。草乃が銀メダルを床にたたきつけている姿が、ニュースやSNSで流れてたん

だ。

「氣を害してしまつたのなら、あやまるわ。負けるのは、はずかしいですものね。」
につこりと、うわべだけの笑みを浮かべる女子。

「だまれよ。」

草乃が、女子のえりをつかんだ。

「氣安くさわらないでくださる？ わたくしは玉照勾姫、小学六年生。由緒ある神社の後

継者なのよ。そして——」

玉照は、パツと草乃の手をはらうと、むねをはつた。

「今日の勝者となり、アマテラスになる者です。無礼な行動はひかえてください。」

草乃に一切ひるまない玉照の所作は、お姫様みたいに優雅だ。

アマテラスつて、『古事記』に登場する神様だ。

その神様になるつて、どういふ意味だろう？

「うわさによると、今宵の博物館にたどりつけるのは、選ばれた者”だけなんですつ

て。そして、『古事記』を読みこんで、十分に準備してきたのは、きつとわたくしだけ。

もう、わたくしの勝ちが決まっているわね。」

玉照が長い黒髪をはらつて、自信満々にほほ笑む。それを草乃は鼻で笑いとばす。

「はっ、アホくせ。巫女お嬢には、ぜつてー負けねえよ。」

「ぼくは八夜ツクヨ、小六……。ゲームが得意だよ、よろしく。」

小型のゲーム機を操作しながら、八夜は口早に言った。

少し猫背でゲームを続けるその指は、目で追えないくらい速い。

おとなしそうな八夜の声は、聞きとりやすくて、よく耳になじんだ。

「なんかお前の声、どつかで聞いたことがある気がする。」

草乃が八夜をジッと見つめる。

「気のせいだよ。」

人見知りなのか、八夜はサツと顔をふせた。そんな八夜は、ポケットがたくさんついて

いる服を着て、横長の大きなカバンを肩にかけていた。

修学旅行なみの荷物が多さだ。

「たしかに、ヒョロガリゲーマーのことなんて、知ってるわけねーしな。」

草乃は独特なあだ名をつけるクセがあるらしい。

わたしをふくめて五人——

つて、いやいや。

「わたしは、帰るから！」

「そんなこと言わないで、楽しもうぜ！ こいつは神喰命、勉強をがんばってるらしいぞ！」

ガシツと、大和が手首をつかんでくる。

お気に入りいの髪飾りかみかざりの上うへからつかまれたから、ちよつと痛い。

「用もちがないなら帰れかえ、まじめ優等生ゆうとうせい。」

草乃くさのが、シツシツと追おいだすように手てをふる。

「はいはい、帰かえりますよ。お腹なかすいてるし、お母かあさんもお父とうさんも心配しんぱいしてるだろうし。」
足あしをふみだしても、ギユツと大和やまとが手てに力ちからをこめてきて、進すすめない。

「ちよつと大和やまと、いいかげんに——。」

——お集あつまりいただき、ありがとうございます。



とつぜん、声（こゑ）がひびいた。

ふり返ると、二階（かい）に続（つづ）く大階段（だいかいだん）に、仮面（かめん）をつけた人（ひと）が立（た）っていた。
学芸員（がくげいん）のようなスーツ姿（すがた）に、鏡（かがみ）ばりの不思議（ふしぎ）なカバンをもっている。

——私（わたし）は、今宵（こよい）のみ特別（とくべつ）に行（おこな）われるゲームのマスターをつとめる、博物館（はくぶつかん）の館長（かんちやう）です。

その声（こゑ）はロボットのように無機質（むきしつ）で、館内（かんだい）のアナウンスとしてひびいた。
白手袋（しろてぶくろ）をしているから、肌（はだ）も見（み）えなくて、年齢（ねんれい）も性別（せいべつ）もわからない。

「え、本（ほん）当（とう）にゲームをするの!？」

【ブルームーン（ブルームーン）の夜（よる）、博物館（はくぶつかん）で三（さん）種（しゆ）の神器（じんぎ）をそろえると、世界（せかい）を書（か）きかえられる】
なんて、ただ（ただ）の都市（とし）伝説（でんせつ）だと思（おも）つてたのに……。

「やつぱり、うわさは本（ほん）当（とう）だつたのね!」

玉照（たまてあ）が、目（め）を輝（かがや）かせて両手（りやうて）を合（あ）わせる。

——ゲームのルールはシンプルです。三（さん）つ（つ）の神器（じんぎ）をそろえた者（もの）が、世界（せかい）を書（か）きかえることが（こ）できます。

だれかが、つばをゴクリとのみこむ音（おと）が、やけに大（おお）きくひびいた。

—くわしいルールは、壁の展示パネルをごらんください。

【基本ルール】

- ルール1…命をうばう行為は禁止・それ以外の行動はすべて許可する
- ルール2…博物館から出てはならない（外に続く扉は閉鎖済み）
- ルール3…神器を得た者には、試験が与えられる
- ルール4…時間制限は3時間・1時間ごとに強制移動あり
- ルール5…3つの神器をそろえ、「世界の記録」に記入することで世界が書きかわる

「……命をうばわないなら、なにをしてもいいってこと!?」
声がひっくり返った。

—はい。そのとおりです。

「それおもしろいな!」

「いや、おかしいでしょ! これ、動画チャンネルとかの、ドッキリ企画だよな?」

ドツキリつて、本^{ほん}当^{とう}になにも知^しらされずにはじまるんだ……。

うで時^{どけい}計^{けい}の針^{はり}は、もう九^{すうじ}の数字^{すうじ}をさしてる。早^{はや}く帰^{かえ}りたい。

——この博^{はく}物^{ぶつ}館^{かん}の展^{てん}示^じ品^{ひん}は、こわれても、もともにもどる仕^し様^{よう}なので、な^{なに}をしても問^{もん}題^{だい}ありません。

「もともにもどるつて、どうい^いう意^い味^み？」

——そのま^まの意^い味^みです。

だめだ。ま^まつたく理^り解^{かい}できな^いい。

わたし、け^けつこ^こうヤ^やバ^ばい状^{じょう}況^{きょう}にま^まきこ^こま^まれ^れて^てる^るの^のか^かも。

「【世^せ界^{かい}の記^き録^{ろく}】つて^つて^てな^なんだ？」

草^{くさ}乃^のがた^たず^ずね^ねると、館^{かん}長^{ちょう}がカ^かバ^ばン^んからぶあ^あつ^つい^い本^{ほん}を^をと^とり^りだ^だした。

——こ^こち^ちら^らです。

両^{りょう}手^てでか^かか^かえ^えな^いとい^いけ^けな^いく^くら^らい、大^{おお}き^きな^な青^{あお}い^い本^{ほん}だ。

角^{かど}がす^すり^りき^きれた^た古^{ふる}そ^そう^うな^な本^{ほん}か^から^らは、長^{なが}い^い歴^{れき}史^しを^を感^{かん}じ^じる。

——こ^ここ^こに^に、こ^この^の世^せ界^{かい}の^の記^き録^{ろく}が^が書^かか^かれ^れて^てい^いま^ます。こ^この^の本^{ほん}に^に、書^かき^きか^かえ^えたい^{たい}世^せ界^{かい}を^を書^かき

「こむことで、この世界を変えることができます。」

「なんだか、小説のシナリオを聞いてる気分だ。」

館長は、見た目も、言ってることもヤバイ。

「こんな人の仕切るゲームになんて、参加してられない。」

よし、帰ろう。

「あのーわたし、まちがえて来ちゃったみたいなんです。帰らせてもらいますね。」

手を上げれば、館長が首を横にふった。

「入り口はすでに閉ざされました。ゲームが終わるまで、外には出られません。」

ハッとふり返ると、さつき入ってきた扉には、太いしめ縄がかかっていた。

「え、いつのまに!？」

あわててしめ縄のかかった扉のもとへ走って、開けようとした途端。

「ゾワッ 全身に鳥はだがつた。」

これ以上先に進んじやいけない、と本能がいつてる。

これ、通報するべきなんじやない？

あわてて、スマートフォンをタップして画面をつけたら。

「うそ……圏外だ。」

ここ、電波がとどかないんだ。

サーッと血の気が引いた。

これたぶん、ドッキリ企画なんかじゃない。

「大和、これ新手の誘拐犯罪かも！早く逃げよう！」

「まあまあ！三時間で帰れるんだから、楽しもうぜ！」

大和が落ちつけよ、と肩をたたいてくる。

もとはといえ、大和のせいなのに！

深呼吸をして、こめかみをトントンツと指でたたいて、目を細める。

かしこく、正しく、冷静に、考えよう。

一、会場は閉鎖されているけど、危険な仕かけはなさそうだし、ほかの子も落ちついて

る。

二、ルールの安全性はびみょうだけど、守っていれば命にかかわることはなさそう。

三、わたしが帰らなかつたら、警察官のお母さんはスマホのGPSで位置を確認するはず。あとは、弁護士のお父さんと、このゲームをうったえればいい。

条件を頭の中で整理すれば、答えは見つかった。

「ゲームが終われば帰れるなら、参加するしかないか。」

わたしは小さくため息をついて、納得したことを伝えるために、館長にうなずいた。

——では、話を続けます。みなさんは、館内ならどこへでも移動可能です。

ただしルールにあるとおり、一時間ごとに、一つの部屋へ移動させられます。神器は移動先に出現します。つどアナウンスを入れますのでご安心ください。

「ルールつて、めんどろくさいよなあ。」

大和が、頭のうしろで手を組んで口をとがらせる。

「そう？ ルールはわたしたちを守るためにあるんだから、大事だと思っけど。」

「命は、つまんないな。」

大和のつまらない基準が、だんだんわかってきた。

「常識やルールを守ることをつまらないって思うんだろうな。」

「なあ知つてたか？ 三種の神器は、絶対に見ちゃいけないって言われるくらい神聖で、神秘的なものなんだ。それをゲットできるなんてワクワクするよな！」

——今回は二つの博物館を使用します。一つはこの国立博物館。もう一つは、科学博物館です。最初の神器については、移動した先で説明します。

館長が、パチンツと指を鳴らす。

その音が、耳にひびいた途端に、視界がぐらりとゆれた。